The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	人文科学系学術論文の冒頭章におけるメタディスコース : 内容・構成面と言語面とのつながりを意識したライティング教育に向けて
Author(s)	小森, 万里
Citation	日本語・日本文化. 2020, 47, p. 49-65
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75879
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈研究ノート〉

人文科学系学術論文の冒頭章におけるメタディスコース
―内容・構成面と言語面とのつながりを意識した ライティング教育に向けて―

小森　万里

1. はじめに

多くのライティング教育研究で、内容や構成に関する問題点が日本語学習者の作文の評価を下げる要因になっているとされている（齊山 1997、田中他 1998、田代 2009、長谷川・堤 2012 など）ように、日本語学習者（以下、学習者）にとって、第二言語である日本語でレポートや論文など一定の長さのある文章を読み手にわかりやすく書くことは難しい。しかし、これは内容・構成だけの問題ではなく、それらを支える日本語表現が適切に使用されているかどうかとも関わっているのではないだろうか。学習者によって書かれたレポートには、レポート内の議論の段階を示す日本語表現が適切に使用されていないために、あらかじめ作成したアウトラインに沿った内容・構成でレポートを書いていても、それが読み手に伝わらないという点があるように思われる。

読み手がテクストの流れを見失うことなく読み進めていくためには、テクストを構成する各文がどのような文として提示されているのかを示す表現が必要となるだろう。そこで、本稿では日本語母語話者が学術論文において論の展開をどのように示しているかについて、使用されている表現に注目しながら考察する。

2. 先行研究

2.1　テクストの流れを示す表現に関する先行研究

坪根・田中（2015）では、第二言語としての日本語小論文の評価において「いい構成」の要素の一つとして挙げられるのがメタ言語表現の使用であるとされ、流れを明示的に示す言語形式の使用が構成のよさを感じさせる大きな要因になっ

ていると述べられている。清水（2011）によれば、このメタ言語表現は分野によって使用のしかたに違いがあり、出現箇所によってもその特徴は異なるということである。

分野による違いについて、Swales（1990）はディスコース・コミュニティにはルールがあり、そのルールが守られていることが必要だとしている。ルールを守って書くということは、書き手が自らの属するコミュニティの中で自身の論を主張するだけでなく、その主張に対し読み手から反応を得ようとする相互作用的な意味交渉を行うことにつながるだろう。例えば、大学・大学院に在籍する学習者は、レポートや論文を執筆することによって自身の所属学部や専攻分野のコミュニティの中で主張を行い、指導教員をはじめ同じ分野の人々から賛同や助言、反論などの反応を得ながら研究活動を進めていく。このような彼らのコミュニティでの円滑な活動を促すためには、彼らの分野においてどのように論を進めそれをどのように読み手に示すことがルールになっているのかについての情報を提示する必要があるだろう。

Hyland（1996, 1998, 2005）は、そのような相互作用的な意味交渉の働きをする要素をメタディスコースと呼んでいる。メタディスコースとは、テクストの中で書き手がある立場を示したり、ある特定のコミュニティのメンバーとして読み手との関係を築いたりするために使われるものである。読み手が命題情報を再解釈したり書き手の立場や観点を拒否したりする選択肢を常に持っているため、書き手はメタディスコースを適切に使用することによって、自らの立場を効果的にサポートしつつ、読み手やコミュニティとの意味交渉を促進することが必要となる。

2.2　メタディスコースの下位分類に関する先行研究

メタディスコースには、書き手の望む解釈やゴールに読み手を導く機能をもつ Interactive metadiscourse（以下、Interactive）と、読み手をテクストに関与させる機能をもつ Interactional metadiscourse（以下、Interactional）がある（Hyland 2005）。

表 1 は、Hyland（2005）による Interactive と Interactional の下位分類である。

Interactive には、読み手に主節間のつながりを解釈させる Transition marker、ディスコースの目的や、議論の順序、段階などを示す Frame marker、テクスト内の他の部分にある情報に言及する Endophoric marker、先行研究など他のテクストに言及する Evidential、言い換えや定義、例示などの情報を提示し書き手の意図した意味を読み手に確認させる Code gloss がある。一方、Interactional には、命題内容に対するコミットメントを保留する Hedge、書き手が述べていることが確実だとする Booster、驚き、賛意、重要性、責務、落胆など命題内容に対する書き手の態度を表す Attitude marker、読み手やコミュニティに対する書き手のスタンスを表す Self mention、ディスコースの参加者に読み手を取り込み、関係構築を図る Engagement marker がある。

表 1　Hyland（2005）のメタディスコースの下位分類

Interactive	Interactional
Transition marker	Hedge
Frame marker	Booster
Endophoric marker	Attitude marker
Evidential	Self mention
Code gloss	Engagement marker

メタディスコースは、文化や分野によって使用のしかたが異なる（Hyland 1998）ため、非母語話者にとって指導なしにそれを使いこなすことは難しい。しかし、効果的に使用できるようになれば、非母語話者であっても、書き手の望む解釈やゴールに読み手を導き、読み手をテクストに関与させるという意味交渉を効果的に行うことが可能になると考えられる。

JASSO の「平成 30 年度外国人留学生在籍状況調査結果」によれば、日本における留学生のうち、46.9% が人文科学を専門分野としている。このことから、人文科学系の分野でレポートや論文を書く必要性のある学習者が多いということが推測できる。

そこで、本稿では人文科学系の学術論文を調査対象とし、冒頭章においてメタ

ディスコースがどのように使用されているかを調査する。冒頭章は、論文のテーマについての背景知識と問題意識を読み手と共有し、論文の意義を読み手に理解させ、論文で何を行うかを示す章であるため、この章を効果的に書くことが、書き手と読み手との相互作用的な意味交渉につながるかどうかに関わっていると考えられるためである。

3. 調査概要

本調査は予備的な調査としての位置づけであるため、人文科学系の中でも分野を絞り、日本語教育学の分野について調査を行う。

佐藤他（2013）によれば、日本語教育学の学術論文では 70% が「実験 / 調査型」であるため、「実験 / 調査型」を調査対象とする。調査の対象としたのは学会名鑑で 1000 人以上の会員をもつ学会誌『日本語教育』に掲載された「実験 / 調査型」論文である。2013 年～ 2015 年の『日本語教育』に掲載された一般投稿論文（特集論文、寄稿論文は除く）のうち、日本語母語話者によって書かれた 15 編を対象とし、この分野の論文に共通してみられるメタディスコースについて、出現箇所と使用目的および機能について考察した。メタディスコースの判定については、Hyland（2005）の定義と分類を援用した。

4. 調査結果

4.1 Interactive の使用状況

本節では、テクストの中を読み手を導いていく機能をもつ Interactive が冒頭章の中でどのように使用されているかをみる。

調査対象論文 15 編における Interactive の出現数と使用者数は、表 2 の通りであった。Transition marker、Frame marker、Evidential は、ほぼすべての書き手が使用しており、出現数も多い。

表 2　Interactive の使用状況

下位分類	出現数	使用者数
Transition marker	72	15
Frame marker	26	15
Endophoric marker	14	4
Evidential	37	14
Code gloss	11	5

4.1.1　Transition marker の使用状況

出現した Transition marker は、以下のとおりである。

以上のことから、以上の点から総合的に判断して、以上のように、以上をまとめると、一方、一方で、このことから、このことから予想される結果として、このことによって、この予想に基づき、さらに、しかし、したがって、そこで、そして、その上で、その結果、そのため、そのためには、そのような状況をふまえて、それに対し、なお、のである、また、よって

Transition marker の中では、「しかし」が出現数 17（使用者数 14 名）と最も多く使用されており、次いで「そこで」が 9（同 9 名）、「また」が 8（同 5 名）、「そして」が 4（同 4 名）であった。冒頭章においてそれぞれの語が使用される箇所はほぼ一定していた。

まず、「しかし」は、冒頭章の冒頭で研究対象や背景の説明をした後、それに対する問題点の指摘がなされる文で使用されていた。「そこで」は、冒頭章の最後で、研究目的や研究行動の提示が行われる文で使用されていた。「また」は研究対象や背景の説明の中で先行研究の情報を追加する際に使用され、「そして」は研究行動を複数挙げる際に使用されていた。以下に使用例を挙げる（【　】と下線は筆者による。【　】は冒頭章の中のどの箇所であるかを表す）。

（1）【背景説明→問題点指摘】音声や非言語行動、人工物の重要性は共有され、個々の教育現場においても学習項目として取り入れられている。しかし、それらが言語形式とどのように関連付けられているかは明らかにされておらず、教師の内省と経験に頼っているのが現状である。（舩橋 2013）

（2）【問題点指摘→研究目的】大学教育を受けるのに必要な日本語を学ぶ日本語学習者にとって基本動詞を文脈の中でいかに正確に使えるようになるかという問題は、教育現場において重要な課題である。そこで、中国語を母語とする日本語学習者（以下、CNS）を対象に、文脈の中で既習語彙である和語動詞を正確に使用できるかについて検討する。（森山 2015）

（3）【背景説明（先行研究情報の追加）】日本語学の先行研究では、タメニは意志的な事態を目的とする場合に使用され、ヨウニには非意志的な事態を表すときに使用されると言われている。また、前田（1995）は、ヨウニは従属節と主節の主語が異なる場合にも使用されると指摘している。（福田・稲垣 2013）

（4）【研究行動の提示】本稿では 、母語話者の終助詞「もの」の使用実態を調査し、上記の疑問点の検証を行った上で、終助詞「もの」の各用法を統一的に説明できる意味を考える。そして、これらの結果をもとに、日本語教育における終助詞「もの」の指導内容を検討する。（松下 2014）

出現数・使用者数の多かった「しかし」と「そこで」は、「研究対象や背景を説明する段階」から「問題点を指摘する段階」へ、あるいは、「問題点を指摘する段階」から「研究目的や研究行動を提示する段階」へと冒頭章の中での段階の移行を示すマーカーとして機能しているとみられる。ここから、Transition marker は読み手に議論の進行がわかるよう導いていくという目的で使用することができると考えられる。

4.1.2　Frame marker の使用状況

出現した Frame marker は、以下のとおりである。

以下に 1 例ずつ示す、以下のような疑問が出てくる、ここでは〜を考察する、この論文の目的は〜ことにある、【節】ではリサーチクエスチョンを立てる、【節】では〜をまとめる、【節】では〜について述べる、その目的のために〜を具体的に示す、本研究では〜について報告する、本稿では〜を明らかにする、本研究では〜を考察した、本研究では〜を〜観点から分析する、本研究では〜を提示する、本研究では〜を目指す、本研究においては / では〜に着目し〜を明らかにする、本稿では〜を記述する、本稿では〜を考察する、本稿では〜を調査し〜を考える、本研究は〜に焦点を当て〜を実証しようとするものである、〜を考える、〜を検討する、〜を対象に〜について検討する、〜を提示する

Frame marker は、15 編中 14 編が冒頭章の最後の部分で使用され、「{本稿 / 本研究 /【節】/ ここ｝では、〜を｛示す / 明らかにする / 考察する / 分析する / 記述する}」などの形をとり、研究目的や研究行動の提示を行っていた。（5）と（6）がその例である。

（5）そこで本稿では、言語少数派の子どもを対象とする母語と日本語による概念学習の過程を可視化し、そうした学習を可能とするためにはどのような学習環境が必要なのかを考察する。（滑川 2015）

（6）そこで本研究では、論文筆者が資料をどのように引用・解釈して論理展開しているのか、また引用・解釈に関わる文が他の論文構成要素とどのように関連して結論に導かれているのかに着目し、引用・解釈文の特徴および機能の分析を通して引用・解釈構造を明らかにする。（山本・二通 2015）

冒頭章における Frame marker は、論文全体の目的や論文の展開を読み手に対して示すことで、論文の全体像を把握させる機能があることがわかる。ここから、Frame marker は読み手に対し、後に続く章を読み進めていくための指針を示すという目的で使用されていると考えられる。

4.1.3　Evidential の使用状況

出現した Evidential は、以下のとおりである（「X」「Y」は人名を、A は調査名を表す）。

（X 年）、（X 年 : 頁）、X（年）が〜と説明しているように、X（年）が〜を示しているが、X（年）では〜が確認されている、X（年）では〜と結論づけられている、X（年）では〜としている、X（年）によると〜ことが示されている、A によれば、X（年）の議論をふまえつつ、X は〜としている（X 年）、〜という指摘もあり（X 年）、X（年）にならい、X（年）によって指摘されている、X（年）の言う〜、X（年）の研究では、X（年）は以下の仮説を立てている、X（年）は次のように述べている、〜は〜とされるが（X 年）、X（年）は〜と指摘する／している、X（年 : 頁）も〜と説いている通り、X（年）が行った〜 A では〜ことを指摘している、従来の研究では〜という議論が定着している（X 年 : 頁、Y 年 : 頁）、〜は〜（X 年, Y 年）などが挙げられる

Evidential は、冒頭章の最初に研究対象や背景の説明を行う箇所で、「（著者名 発行年 : 頁）」「著者名（発行年）は〜と｛述べて / 指摘して｝いる」「著者名（発行年）では〜が｛確認 / 蓄積｝されている」などの形式で先行研究に言及するために使用されている。Evidential を含む文は、（7）のようにテーマについて書き手が問題点の指摘をするための前提を説明する文や、（8）のように書き手の示す観点が重要であることの根拠を示す文で使用されるものが多い。

（7）引用・解釈に関する研究には、発話資料を中心とした砂川（1998, 1989）、藤田（1986, 1988）、中園（2006）など、引用を伴う解釈研究がある。しかし、論文についてはこれまで引用の形式・方法などを中心とした研究が主で、引用・解釈における論理展開構造に着目した研究は管見の限り見当たらない。（山本・二通 2015）

（8）概念のいわば形骸化は日本語を母語とする子どもにも見られ、田島

（2011:343）は、生徒たちが単に暗記した概念を使って授業において提示される課題をこなすこともあると指摘する。それを避けるためには、子どもが自分自身のこれまでの知識や感情体験をすべて総動員し、重ねあわせて理解すること、説明できるか否かという次元を超えた、まさに身をもって概念を理解する（中村 2010:157）ことが重要である。（滑川 2015）

以上の例から、Evidential は研究の対象や背景の説明をする段階において、書き手の重視する点に読み手を注目させ、なぜそれが重要であるかという根拠を提示する目的で使用されていることがわかる。このように、テーマに関する問題点や注目すべき点の提示に先立って Evidential を使用することは、その後の議論に読み手がついていけるよう、議論の土台を作る機能を果たしていると考えられる。

4.1.4　Interactive の考察

冒頭章において読み手を導く要素としては、Transition marker、Frame marker、Evidential が段階 1 ～段階 3 にわたって、一定の箇所で、一定の使用目的や機能をもって使用されていることがわかった（表 3）。

表 3　冒頭章の段階と Interactive の使用箇所・使用目的・機能

段階	Interactive	使用目的	機能
段階1 研究の対象/ 背景の説明	Evidential	段階2 に進むための前提/ 根拠提示	議論の土台作り
	Transition（しかし）	読み手を導く	段階の移行
段階2 問題点/ 重要点の指摘			
	Transition（そこで）	読み手を導く	段階の移行
段階3 研究目的/ 研究行動の提示	Frame marker	論文を読み進める指針の提示	全体像の表示

冒頭章の段階 1 は研究対象や背景の説明を行う段階である。ここでは、段階 2 で問題点や重要な点を指摘するための前提や根拠を示すことを目的として Evidential が使用され、論文内の議論の土台作りを行う。次に、段階 2 へと読み手を導くために Transition marker「しかし」が使用され、議論は次の段階に移行する。段階 2 では問題点の指摘をして注目すべき点を読み手に示す。その後、Transition marker「そこで」によって段階 3 に移行する。段階 3 では研究目的や研究行動の提示を行う。ここでは、論文を読み進めるための指針を読み手に提示するために Frame marker が使用され、読み手に論文の全体像を把握させる。

初めてレポートや論文を書く学習者の中には「序論で何を書けばよいかわからない」と言う者もいるが、このように各段階で行うべきことと段階相互の関係を、それを示すために必要な日本語表現とともに提示することによって、学習者にとってより具体的に冒頭章をイメージしやすくなるのではないだろうか。

4.2　Interactional の使用状況

本節では、読み手をテクストに関与させる機能をもつ Interactional が冒頭章の中でどのように使用されているかをみる。調査対象論文 15 編における Interactional の出現数と使用者数は、表 4 の通りであった。多くの書き手が使用していたのは Hedge と Attitude marker であり、出現数も多かった。

表 4　Interactional の使用状況

下位分類	出現数	使用者数
Hedge	26	13
Booster	7	6
Attitude marker	30	13
Self mention	3	2
Engagement marker	0	0

4.2.1　Hedge の使用状況

出現した Hedge は、以下のとおりである。

恐れがある、必ずしも〜ではない、可能性も否定できない、可能性を払拭できない、管見の限り見あたらない、傾向が強い、想像に難くない、であろう、と考えられる、と考える、とは言いがたい、とも考えられる、とは言えない、と予測できる、のではないだろうか、ものと思われる

Hedge は、26 例中 14 例が、研究対象や背景の説明の中で挙げた先行研究の問題点を指摘する文に出現していた。Hedge の使用者すべてにあたる 13 名がこのような使用をしており、冒頭章における Hedge の代表的な使い方であることが示唆される。前文脈に「しかし」「〜が」などの逆接の接続表現を共起させ、（9）のように「〜とは｛言えない / 言いがたい｝」「必ずしも〜ではない」など部分否定する表現、（10）のように「〜と｛考えられる / 推測できる｝」など間接的な認識を通した判断であることを示す表現、（11）のように「〜｛恐れがある / 可能性を払拭できない｝」など可能性を示す表現といった Hedge とともに、問題点の指摘を行っている。

（9）一方、従来の教室を中心とした学習の見方において知識は個人の頭の中に蓄積されるものとされ、ことばの能力も学習者個人が発揮するものとされてきた。したがって、学習は個人の内部において完結し、その成果も数値化が可能なものと考えられてきた。しかし、現実社会における学習は必ずしもそのようなものではない。（大平 2015）

（10）これまで格助詞の習得に関しては、「二」と「デ」、「ヲ」と「二」などに注目した研究は多く行われてきたが、「ガ」と「ヲ」に注目したものは少ない。また「ガ」「ヲ」は通常、学習初期に導入され、「二」や「デ」と比べると用法は多様ではない。学習者はそれらの文法知識は持っているものの、正しい言語運用には至っていないとも考えられる。（永井 2015）

（11）日本語教育の現場では、「です・ます」体から導入され、相手をプラスに

> 待遇する敬語が初級の段階から丁寧に指導される一方で、相手をマイナスに評価し、待遇する行為や表現について指導されることは稀である。（中略）しかし、学習者は会話の中で発話の受け手として、相手からの否定的な評価を理解しなければならない場面もある。そこで理解ができなくては、事情説明や謝罪等、適切な反応を返すことは難しく、それがもとで対人関係を損なう恐れがある。（関崎 2013）

問題点指摘という否定的な言及を行う際に Hedge が使用されるのは、命題内容に対する全面的なコミットメントを保留する機能をもつ（Hyland 2005）ためであろう。これは、先行研究に対する問題点指摘について、読み手が書き手と同様の問題意識をもっていなかった場合に、書き手の指摘に対して同意を得られない可能性もあることへの配慮の表れだと思われる。書き手としては、先行研究についての問題点を読み手と共有したうえで、これを議論の土台として冒頭章のあとに続く章の議論が読み進められることを望んでいるだろう。そのため、冒頭章の段階で断定的で一方的な議論だと読み手に拒否されないよう慎重に論を展開する目的で Hedge が使用されるのではないかと思われる。

4.2.2　Attitude marker の使用状況

出現した Attitude marker は、以下のとおりである。

> 看過できない問題である、肝要、喫緊の課題である、これまで十分認識されてこなかった、指針になる、重要である、重要な課題である、重要な要素となる、想像に難くない、留まっていた、なければならない、のだろうか、のみ、はずである、必要がある、必要である、必要とされる、必要となる、必要ではないだろうか、不可欠である、不可欠なものである、目が行ってしまう、求められている、留意すべき

Attitude marker は表 3 における冒頭章の段階 1 ～段階 3 の流れのうち、段階 2 で問題点指摘を行った後、その指摘について書き手が重要だと考えることを述べ

る箇所で出現している。（12）がその例であるが、30 例中 23 例がこのような使用のしかたであった。

（12）【背景説明→問題点指摘→書き手が重視する点→研究行動の提示】

候補者の日本語については、国家試験を見据えたコーパスの構築（中村・秋元・李 2010）や漢字の定量的調査（中川・中村・角南・齋藤 2011）、介護語彙リスト作成のためのヒアリング調査と介護記録の分析（野村・川村 2009）等、国家試験や言語対象の調査や分析が蓄積されている。しかし、あわせて着任から介護現場への定着に至るプロセスに、日本語教育がどのように貢献できるのか示すことも肝要であろう。そのためには、受入れ現場における候補者の日本語をめぐる問題を、「当事者」の視点から把握する必要がある。

そこで、筆者は、現場を担う「当事者」の視点から候補者の日本語をめぐる問題を多角的に明らかにすることを目指して、介護施設におけるフィールドワークを行った。（上野 2013）

書き手が指摘した問題点に対して書き手自身の態度を明示するのは、読み手とその重要性を共有するためであると考えることができる。重要性を共有することは、読み手にその論文の意義を理解してもらうことにつながるだろう。このように、Attitude marker には読み手に論文の意義に気づかせ、そのあとに続く議論を読み進めてもらうための土台を作る機能があると考えられる。

5. 総合考察

4 節から、冒頭章で使用されるメタディスコースには 2 つの機能があることが示唆される。1 つ目は、読み手に論文の全体像を把握させる機能、2 つ目は、後続する章の議論に読み手がついていけるようテーマに関する問題点や注目すべき点を示して議論の土台を作る機能である。1 つ目の機能は Frame marker が、2 つ目の機能は Evidential と Hedge と Attitude marker が担っている。そして、Transitional marker は冒頭章内での段階の移行を示し、読み手を導いている。こ

れらの機能が冒頭章で果たされることが、論文を介した書き手と読み手の相互作用的な意味交渉につながるのではないだろうか。

冒頭章における Interactive と Interactional の使用のしかたをまとめたものが表 6 である。

表 6　冒頭章におけるメタディスコースの使用箇所・使用目的・機能

段階	メタディスコース	使用目的	機能
段階1 研究の対象/ 背景の説明	Evidential	段階2 に進むための前提/ 根拠提示	議論の土台作り
	Transition（しかし）	読み手を導く	段階の移行
段階2 問題点/ 重要点の指摘	Hedge	慎重な論の展開	議論の土台作り
	Attitude marker	重視すべき点の読み手との共有	
	Transition（そこで）	読み手を導く	段階の移行
段階 3 研究目的 / 研究行動の提示	Frame marker	論文を読み進める指針の提示	全体像の表示

6. まとめと今後の課題

本稿では、日本語教育学の分野における実験 / 調査型論文の冒頭章でのメタディスコースの使用状況を調査した。その結果、メタディスコースの使用箇所、使用目的と機能には一定の傾向があることがわかった。メタディスコースの使用状況を明らかにすることは、日本語のアカデミック・ディスコースを内容・構成面と言語面という 2 つの面から同時にみることにつながるだろう。

日本語を母語としない学習者に対するライティング教育において、内容・構成面の指導と日本語表現面での指導は切り離せるものではなく、両者がどのように組み合わされアカデミック・ディスコースが成り立っているかを明示的に示すことが、読み手との意味交渉を促すような文章を書くことにつながると筆者は考えている。今後は中間章・最終章など後続の章についてもメタディスコースの使用箇所、使用目的、機能を調査することにより、日本語による学術論文がどのようなメタディスコースによって構成されているのかを検討し、内容・構成面と言語

面を統合させたアカデミック・ライティングのための教育につなげたいと考える。

参考文献

齊山弥生（1997）「読み手の期待と作文の質」『産能大学紀要』第 18 巻 1 号 pp.13-24

佐藤勢紀子・大島弥生・二通信子・山本富美子・因京子・山路奈保子（2013）「学術論文の構造型とその分布―人文科学・社会科学・工学 270 論文を対象に―」『日本語教育』154 号 pp.85-99

清水まさ子（2010）「論文におけるメタ言語表現について―メタ言語表現と論の展開とのかかわり―」『NEAR Conference Proceedings Working Papers』pp.2-15

田代ひとみ（2009）「読み手の評価別に見た日本語学習者の意見文の問題点」『横浜国立大学留学生センター教育研究論集』第 16 号 pp.75-97

田中真理・初鹿野阿れ・坪根香里（1998）「第二言語としての日本語における作文評価―「いい」作文の決定要因」『日本語教育』第 99 号 pp.60-71

坪根香里・田中真理（2015）「第二言語としての日本語小論文評価における「いい内容」「いい構成」を探る―評価観の共通点・相違点から―」『社会言語科学』第 18 巻 1 号 pp.111-127

独立法人日本学生支援機構 「平成 30 年度外国人留学生在籍状況調査結果」https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/2018/index.html （2019.12.25 アクセス）

長谷川哲子・堤良一（2012）「意見文のわかりやすさを決めるのは何か？―大学教員による作文評価を通じて―」『関西学院大学日本語教育センター紀要』創刊号 pp.7-18

Hyland, K. (1996) Nurturing Hedges in the ESP Curriculum, System, Vol.24, pp.477-490

Hyland, K. (1998) Persuasion and Context: The Pragmatics of Academic Metadiscourse, *Journal of Pragmatics*, Vol.30, pp.437-455

Hyland, K. (2005) *Metadiscourse*, Continuum, New York

Hyland, K and Tse, P. (2004) Metadiscourse in Academic Writing: A Reappraisal, *Applied Linguistics* Vol.25, No.2, pp.156-177

Swales, J. (1990) *Genre Analysis*, Cambridge University Press

引用文献

上野美香（2013）「介護施設におけるインドネシア人候補者の日本語をめぐる諸問題―日本人介護職員の視点からの分析と課題提起―」『日本語教育』156 号 pp.1-15

大平幸（2015）「専門用語が生活において意味のあることばになっていく過程―ジャンルの獲得という視点からの分析―」『日本語教育』160 号 pp.79-93
関崎博紀（2013）「日本人大学生同士の雑談に見られる否定的評価の言語的表現方法に関する一考察」『日本語教育』155 号 pp.111-125
永井絢子（2015）「スリランカ人日本語学習者の格助詞の習得―シンハラ語母語話者の作文に見られる「ガ」を中心に―」『日本語教育』161 号 pp.31-41
滑川恵理子（2015）「言語少数派の子どもの生活体験に裏打ちされた概念学習－身近な大人との母語と日本語のやり取りから－」『日本語教育』160 号 pp.49-63
福田純也・稲垣俊史（2013）「上級日本語学習者による目的を表す「ために」と「ように」の習得－「ために」の過剰般化は中国語話者に特有か－」『日本語教育』156 号 pp.31-44
舩橋瑞貴（2013）「注釈挿入における発話構造の有標化－言語形式以外のリソース使用に注目して－」『日本語教育』155 号 pp.126-141
松下光宏（2014）「コミュニケーションのための終助詞「もの」の用法－母語話者と非母語話者の使用実態から」『日本語教育』159 号 pp.30-45
森山仁美（2015）「文脈における和語動詞語彙の産出－中国語母語話者のケース－」『日本語教育』161 号 pp.2-14
山本富美子・二通信子（2015）「論文の引用・解釈構造－人文・社会科学系論文指導のための基礎的研究－」『日本語教育』160 号 pp.94-109

〈キーワード〉 アカデミック・ライティング、冒頭章、メタディスコース、
読み手との意味交渉

Metadiscourse in the Initial Section of Academic Papers in Humanities: Towards Writing Education Focusing on Connection between Content and Language

KOMORI Mari

The usage of metadiscourse in the initial section of academic papers by native Japanese speakers to promote communication with readers, to support the position of writers, and to establish relationships with readers was investigated. As a result of the investigation, it was found that the metadiscourse in the initial section has two functions: (1) to give the reader an overview of the paper, (2) to make the basis of the discussion clear by specifying the problems and the points to be noticed on the theme so that the reader can follow the subsequent discussion. Moreover, it was suggested that the first function is played by Frame markers and the second by Evidentials, Hedges, and Attitude markers. By fulfilling those two functions in the initial section, interaction between the writers and the readers or the writers and the discourse community to which the writers belong may be promoted.